

大きなパラダイムシフトが進行する国際情勢の中で、
国民に何も説明せず、みくだす横暴な仲間政治 これではよいのだろうか...
なぜ、日本では新しい雇用・ビジネスを生む事業・企業が生まれない。
理念も目標も失いいまだに高度成長期の流れにしがみつく日本



署名した共同声明を手にする安倍晋三首相(左)とトランプ米大統領=25日、米ニューヨーク、岩下毅撮影

自分たちでなければの想いにしがみつく老害に
翻弄される日本
東京一極中心の政治・経済も破綻
良くも悪くも 推進役を若者たちへ

貿易協定合意 米に苦戦

米の牛・豚関税下げ 日本車は撤廃先送り

天声人語

英語で「私は二つの帽子をかぶっている」といえば、二つの役割を担っているという意味になる。米国で帽子は、自分がどのような人間かを示す小道具でもある。映画監督マイケル・ムー

ア氏の野球帽からは労働者階級の心意気が伝わる▼カウボーイハットは牛を育てる人の誇りであろう。そんな帽子の男たちが、日米貿易協定をめぐる首脳会談の場に招かれていた。「日本の人々にとって今日は素晴らしい日だ。もっと米国の牛肉を買うことができるのだから」▼協定によれば牛肉にかかる38%の関税が段階的に9%まで下がる。トランプ大統領が「米国の農家や牧場にとって大きな勝利だ」と喜ぶのは分かる。しかし安倍首相が「両国にとってウインウイン」と言ったのは釈然としない▼日本から輸出する乗用車の関税の撤廃は継続協議にとどまった。もしも自動車エンジンアたちが招かれても、こう言うしかないだろう。

「米国の人々が日本の車をもっと安く買える。そんな素晴らしい日がいっ来るのか、本当に分らない」▼車の話が煮詰まらぬのに、なぜこんなに慌てて合意したのか。米中貿易摩擦で割を食っている農家の人気を取りたい、という米側の意向だと推測される。大統領の選挙運動の手伝いを日本が担わされているとしか思えない▼車の関税撤廃どころか、追加関税をかけるぞと米側から脅されながらの交渉だった。「大喜びすること」を英語で「囃子を空に投げる」という。トランプ氏はそんな気持ちだろうか。

「米国が世界に広げた自由主義のひずみを正さないと、中国など対抗モデルに代わられてしまう」

末盛亮氏撮影

——西洋ではナショナリズムや「人契」とり政治、とも言うべきホビュリズムが人々の不満の「受け皿」になっていると言われます。

「もともとナショナリズムは人々の忠誠心を地域社会から国家に移行させる試みでした。今ではグローバル化に歯止めをかけ、国家という単位の中で引き継がれてきたものを守る営みへと変わりました。帰属意識や忠誠心の強制ではない。

デニーン氏は保守派の政治学者だが、単に旧秩序への回帰や道徳心の復讐を説いてるわけではなない。貧富、学歴、世代など、グローバル社会を貫く無数の分断線を前に、「当たり前と信じてきた価値観を疑え」「ローカルに立ちあがる」という指摘は新鮮に響く。

（青山直廣、アメリカ総務局長・資料提供）

「自分がよければ」 未来への責任欠く 財政も環境破壊も

「自由主義（リベラリズム）の失敗」を説く論者が、米国にあらわれた、世界中で強権政治が台頭し、民主国家の繁栄を支えてきた自由主義を脅かしている。だが、その自由主義こそが深刻な社会の分断、政治不信の原因になったというのだ。どこに問題があったのか。そして、どうすれば失敗から抜け出せるのか。

——導く考えを持つ個人の多様、譲などにつながっています」

「自由主義（リベラリズム）の失敗」を説く論者が、米国にあらわれた、世界中で強権政治が台頭し、民主国家の繁栄を支えてきた自由主義を脅かしている。だが、その自由主義こそが深刻な社会の分断、政治不信の原因になったというのだ。どこに問題があったのか。そして、どうすれば失敗から抜け出せるのか。

「自由主義（リベラリズム）の失敗」を説く論者が、米国にあらわれた、世界中で強権政治が台頭し、民主国家の繁栄を支えてきた自由主義を脅かしている。だが、その自由主義こそが深刻な社会の分断、政治不信の原因になったというのだ。どこに問題があったのか。そして、どうすれば失敗から抜け出せるのか。

「自由主義（リベラリズム）の失敗」を説く論者が、米国にあらわれた、世界中で強権政治が台頭し、民主国家の繁栄を支えてきた自由主義を脅かしている。だが、その自由主義こそが深刻な社会の分断、政治不信の原因になったというのだ。どこに問題があったのか。そして、どうすれば失敗から抜け出せるのか。

「自由主義（リベラリズム）の失敗」を説く論者が、米国にあらわれた、世界中で強権政治が台頭し、民主国家の繁栄を支えてきた自由主義を脅かしている。だが、その自由主義こそが深刻な社会の分断、政治不信の原因になったというのだ。どこに問題があったのか。そして、どうすれば失敗から抜け出せるのか。

「自由主義（リベラリズム）の失敗」を説く論者が、米国にあらわれた、世界中で強権政治が台頭し、民主国家の繁栄を支えてきた自由主義を脅かしている。だが、その自由主義こそが深刻な社会の分断、政治不信の原因になったというのだ。どこに問題があったのか。そして、どうすれば失敗から抜け出せるのか。

「自由主義（リベラリズム）の失敗」を説く論者が、米国にあらわれた、世界中で強権政治が台頭し、民主国家の繁栄を支えてきた自由主義を脅かしている。だが、その自由主義こそが深刻な社会の分断、政治不信の原因になったというのだ。どこに問題があったのか。そして、どうすれば失敗から抜け出せるのか。

「自由主義（リベラリズム）の失敗」を説く論者が、米国にあらわれた、世界中で強権政治が台頭し、民主国家の繁栄を支えてきた自由主義を脅かしている。だが、その自由主義こそが深刻な社会の分断、政治不信の原因になったというのだ。どこに問題があったのか。そして、どうすれば失敗から抜け出せるのか。

米政治学者

Patrick Deneen
パトリック・デニーン さん

1964年生まれ。米ノートルダム大学教授。近著に「Why Liberalism Failed（自由主義はなぜ失敗したか）」（2018年）。



ならないのは、自分たちが貧困にあえいでいる境遇以上に、格差という現実そのものなのです」

「富が集中する都市と地方の格差も多く、先進国で深刻です。自由主義の果実を得ている人々に比べて、自然、時間、土地」といった制約は別になくたって困らぬ。自由は動き回れる、いわゆる「モスボリタン」を自任する人々です。自由主義は貴族階級を葬ることに成功しましたが、その後釜として、新たなエリート層という別の特権階級をつくりだしてしまっただけです」

——トランプ米大統領は自由主義に疑問を呈したフーチン氏の見方について、「米国を見て、（自由が）素晴らしいとは思えなかつた」と発言しました。

「そもそもトランプ大統領の就任演説は、驚くほど米国が絶望的な状態にあることを訴える内容で

自ら根ざすもの 再認識が必要 ローカル復権を

した。現在の政治、社会、経済の状況は深刻な危機で、かつてないほどの絶望感が覆っています。トランプ氏はそれを直感的に感じていたのではないのでしょうか」

「米国では過去50〜60年間、極端にはないにせよ自由な市場と小さな政府を支持する層と、経済秩序を重んじた大きな政府を支持する層に分かれ、それが共和党内と民主党内の対立軸です。今は右派と左派の双方から、政府と市場に攻撃の矛先が向かっています。背景にあるのは、政治でも経済でも人々が自身の運命をコントロールする力を失ったという感覚です」

——トランプ氏が大統領に選ばれたのは、その反動ですか。

「トランプ氏の台頭が興味深いのは、（エリート特権層が支配している）戦後の「アメリカ帝国」に立ち向かったといえることです。彼らが人々が自分たちの国の運命をコントロールできた時代、空間に戻るか」という問題意識を掲げて選ばれてきたことなのです」

——その米国を脅かす存在として台頭してきた中国は、民主化せずに高度な人工知能（AI）の技術、産業化した社会の管理を進め、経済成長を保つとしています。

「AIという超人間的なものを、使って経済成長と社会安定を保つようにすれば、人間の存在意義は揺るぎかねません。SFのようですが中国はそういう非人間的な方向に向かっているようにみえます。まねるのではなく、人間の価値をその文明を築けるか、西洋世界にはそれが問われています」

——西洋ではナショナリズムや「人気が政治」とも言うべきポピュリズムが人々の不満の「受け皿」になっていると言われます。

「もともとナショナリズムは人々の忠誠心を地域社会から国家に移行させる試みでした。今ではグローバル化に歯止めをかけ、国家という単位の中で引き継がれてきたものを守る営みへと変わりました。帰属意識や忠誠心の強制ではないでしょうか」

——「米国が世界に広げた自由主義のひずみを正さないと、中国など対抗モデルに代わられるでしょう」

「自由主義の危機を説く論者は最近多いが、自由主義そのものの欠陥を論じたデニーン氏の近著は注目を集めた。オバマ前大統領は「西側社会が何を見失ったのかを考えさせる書」と評した。思い出す話がある。前回の米大統領選中、ヒラリー・クリントン氏がトランプ氏支持者を「嘆かわしい人々」と形容した発言だ。グローバル化の勝者が敗者を見下すような発言が、自由主義を標榜する政治家の口から発せられた衝撃は大きかった。

デニーン氏は保守派の政治学者だが、単に旧秩序への回帰や道徳心の復権を説いているわけではなく、貧富、学歴、世代など、グローバル社会を貫く無数の分断線の前に、「当たり前に信じてきた価値観を疑え」「ローカルに立ち返る」という指摘は新鮮に響く。（青山学院大アメリカ経済学部長・野村）

取材を終えて

自由主義の危機を説く論者は最近多いが、自由主義そのものの欠陥を論じたデニーン氏の近著は注目を集めた。オバマ前大統領は「西側社会が何を見失ったのかを考えさせる書」と評した。思い出す話がある。前回の米大統領選中、ヒラリー・クリントン氏がトランプ氏支持者を「嘆かわしい人々」と形容した発言だ。グローバル化の勝者が敗者を見下すような発言が、自由主義を標榜する政治家の口から発せられた衝撃は大きかった。

デニーン氏は保守派の政治学者だが、単に旧秩序への回帰や道徳心の復権を説いているわけではなく、貧富、学歴、世代など、グローバル社会を貫く無数の分断線の前に、「当たり前に信じてきた価値観を疑え」「ローカルに立ち返る」という指摘は新鮮に響く。（青山学院大アメリカ経済学部長・野村）

